

『防長風土注進案』に記載された淡水性魚介類の 分布にみられる共通性と地域性

中村 大*・五島 淑子

Commonality and Regional Characteristics in the Distribution
of Freshwater Fish and Shellfish in *Bōchō Fūdo Chūshin-an*
in the 19th Century

NAKAMURA Oki*, GOTO Yoshiko

(Received September 28, 2018)

キーワード：淡水性魚介類、村群、地理情報システム (GIS)、分布類型

はじめに：本研究の経緯

長州藩が幕末に編纂した地誌『防長風土注進案』に記載された村を地図上に示し食料生産の地域性を考察する研究は2002年より開始されたが（荒木・五島・ミホバ2002）、2016年度に村別地図データが完成したことにより（中村・五島2015、2016、2017）、地理情報システム (GIS) 上で他のさまざまな地図データとの連携が可能となった。ちなみに、長州藩の範囲は、令制国でいえば周防国と長門国、現在の山口県から下関地域と岩国地域を除いた領域にほぼ相当する。

これまでは農作物と採集品の分布パターン分析を行い（中村・五島2017、2018）、今年度は淡水性魚介類を対象とした研究を行った。『防長風土注進案』に記載された淡水性魚介類の主な品目や生産高についてはすでにまとめられているが（五島1987、1990、2015）、本論文はそれらの空間分布に関する本格的な研究の端緒を開くものである。淡水性魚介類の分布研究には、河川水系ごとにどのような特徴があるのか、河川次数との関係はどうなっているのか、地形や標高による違いはあるのかなどさまざまな視点がある。本論文では、長州藩内の淡水性魚介類の分布状況の全体像の提示、水系や地域間の共通性や地域性の数量化・地図化という基礎的研究の成果をまとめる。

また、長州藩内における産物の地域性の検討では、これまで宰判を地域区分として利用してきたが、本論文では藩内の328村を地理的なまとまりをもつグループ（村群）に分け、それらを空間単位として分布や地域性を把

握するという新たな試みに挑戦する。

1. 分析対象とする資料

今回の分析対象は、山口大学教育学部論叢第64巻第1部の「『防長風土注進案』の産物記載にみる食品目録（2）－魚介類・海藻類を中心に－」（松森・山根・中村・五島2015）で整理した目録のうち、河川や湖沼を主な生息地とする淡水性魚介類である。品目には魚類25品目、貝類2品目、節足動物2品目を含む。（表1、注1）。なお、宰判別集計と今回の水系村群別集計の結果にどのような違いがあるかを比較できるよう、表1では各宰判の村数に対する記載比率を掲載する。実数値は第64巻第1部（松森・山根・中村・五島2015）を参照されたい。

2. 分析

2. 1. 目標と分析の手順

『防長風土注進案』に記載された淡水性魚介類が長州藩内にどのように分布し、どのような地域性を形成しているか。これらを読み解くための第一歩は、藩内を流れる6つの主要河川水系（錦川、佐波川、樫野川、厚東川、厚狭川、阿武川）における品目の出現率とその構成を明らかにすることである。これらの水系は、17宰判のうちの13にまたがり、6つの水系域内には全328村中153村が含まれる。水系間で共通する品目や地域に偏る品目を明らかにすることは、食料生産における地域性の解明に関する基礎的研究として重要である。また、主要水系

* 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構

表1 『防長風土注進案』に記載された淡水性魚介類の宰判別の記載比率

凡その水系・地区		瀬戸内東部				錦川		佐波川		榎野川		厚東川		厚狭川		日本海西部		阿武川	
目録No.	宰判名	大島	上関	熊毛	都濃	奥山代	前山代	三田尻	徳地	山口	小郡	舟木	美祢	吉田	先大津	前大津	当島	奥阿武	
	村数	32	26	25	19	16	13	31	20	22	16	26	11	15	13	12	12	19	
9	ウナギ	44%	58%	60%	68%	25%	23%	—	100%	86%	81%	77%	55%	60%	69%	83%	67%	68%	
20	ギンブナ	25%	46%	60%	37%	—	8%	—	40%	50%	81%	81%	73%	67%	92%	75%	8%	63%	
27	ハヤ	9%	27%	48%	63%	13%	31%	—	90%	82%	44%	69%	9%	47%	23%	50%	33%	74%	
28	ドジョウ	22%	50%	44%	68%	—	8%	—	35%	36%	69%	73%	18%	73%	62%	67%	17%	11%	
33	アユ	3%	12%	40%	37%	38%	46%	—	70%	68%	13%	42%	55%	33%	62%	25%	58%	21%	
84	ゴリ	28%	62%	24%	42%	—	15%	—	50%	59%	13%	—	—	—	38%	92%	42%	74%	
22	コイ	9%	12%	4%	5%	—	—	—	10%	9%	44%	46%	27%	40%	—	42%	17%	32%	
30	ナマズ	—	—	—	—	—	—	—	35%	9%	44%	23%	18%	33%	23%	8%	17%	5%	
35	サクラマス	28%	8%	4%	5%	19%	23%	—	50%	—	—	—	9%	—	8%	33%	—	5%	
95	ヒラメ	13%	4%	—	16%	13%	38%	—	30%	9%	—	—	—	—	—	—	—	—	
29	ギギ	—	—	—	21%	—	23%	—	60%	—	—	—	—	—	—	25%	—	—	
128	タニシ	22%	31%	—	—	—	—	—	—	—	25%	—	—	—	15%	58%	8%	—	
26	ウグイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4%	—	13%	—	—	17%	5%	
18	タナゴ	6%	27%	—	—	—	—	—	—	—	6%	—	—	—	46%	25%	—	—	
23	カマツカ	—	—	—	5%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17%	8%	—	
41	メダカ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	85%	33%	17%	—	
25	アブラボテ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	54%	25%	17%	—	
59	カジカ	—	—	—	5%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	31%	25%	—	—	
34	サケ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8%	—	5%	
82	ドンコ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23%	17%	—	—	
31	アカザ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25%	—	—	
24	ムギツク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17%	—	—	
47	オヤニラミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17%	—	—	
58	アユカケ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8%	—	—	
19	カワムツ	—	—	—	—	—	—	—	10%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
21	キンギョ	3%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
123	カワニナ	—	4%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8%	—	
139	モクズガニ	—	12%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
148	カワエビ	—	—	—	5%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8%	—	—	

周辺の沿岸部を中心とする地区についても品目の構成を整理する。これにより、長州藩全域における空間分布の特徴を考慮に入れつつ、河川水系の淡水性魚介類の内容についてよりの確な評価が可能となる。

分析方法には、先に述べたように大きな変更がある。農作物と採集品の空間分析では、その地域性は地形環境に影響を受けると想定し、宰判を近似的な地形環境の区分として用いた（中村・五島2017、2018）。大島宰判は周南島嶼地域、奥山代、前山代、徳地宰判は西中国山地や周防山地に相当する山間地域、舟木、吉田宰判は周南丘陵地域にあたる。一方、今回の分析対象である淡水

性魚介類の分布を規定する主な要因の一つは河川水系である。そこで、藩内の328村を水系など地理的なまとまりをもつグループ（村群）に分け、それらを空間単位として品目を集計し、水系・地区間の比較をもとに淡水性魚介類の空間分布の特徴をまとめる。

2. 2. 対応する村群の抽出

各村のデータを河川水系別に集計するためには、どの村がどの水系に属するのかを判定し、水系ごとに村々を振り分ける必要がある。村の「面」と河川の「線」との重複関係については、GIS（地理情報システム）の

表2 各水系別村群と各沿岸部地区に属する宰判と村

No	村群名	合計 村数	含まれる宰判	村 数	村群の内容（各宰判で該当する村、除外する村）
1	錦川水系 村群	33	奥山代(全村)	16	宇佐村、宇佐郷大原村、本谷村、秋掛村、阿賀村、中山村、生見村、下畑村、南桑村、波野村、本郷村、黒沢宇塚村、須川村、深川村、苅谷村、小川添谷村。
			前山代(全村)	12	中須村を除く。広瀬村、中ノ瀬大野村、四馬神村、根笠村、三瀬川村、瀬越村、野谷村、金峯村、鹿野上村、鹿野中村、鹿野下村、大潮村。
			都濃・熊毛	5	都濃宰判の須々万本郷村、須々万奥村、長穂村、下谷村。熊毛宰判の八代村。
2	佐波川水系 村群	37	三田尻	16	東佐波令、西佐波令、植松村、切畑村、上右田村、下右田村、高井村、大崎村、佐野村、真尾村、和字村、久兼村、奥畑村、鈴屋村、奈美村、中山村。
			徳地(全村)・ 小郡	21	串鯖河内村、巢山村、高瀬村、夏切村、埴村、馬神米光村、上村、藤木村、島地山畑村、柚木村、野谷村、船路村、引谷村、三谷村、八坂村、深谷村、小古祖村、堀村、伊賀地村、岸見村。小郡宰判の台道村。
3	榎野川水系 村群	25	山口	21	桜畑村、恋路村、中村、七房村、御堀村、仁保庄上郷、仁保庄下郷、小鯖村、長野村、深野村、矢田村、間田村、平井庄・吉田郷・恒富保、矢原村、黒川村、吉敷村、平野村、朝田村、上字野令、下字野令・中尾、山口街。除外は篠目村。
			小郡	4	中下郷、上中郷、賀川村、名田島
4	厚東川水系 村群	27	舟木	16	東吉部村、西吉部村、東万倉村・矢矯村・芦河内村、東須恵村、際波村、藤曲村・奥壇村・中山村、中野御開作・妻崎御開作、沖ノ且村・広瀬村・末信村・棚井村、吉見村、木田村・瓜生野村・車地村・山中村、楢小野、藤河内村、小野檫原、如意寺村・下ノ小野村、市ノ小野、宇内村・上ノ小野村。除外した10村は瀬戸内西部。
			美祢(全村)	11	大田村、綾木村、長田村、真名村、岩永村、秋吉村、嘉万村、青景村、赤村、絵堂村、長登村
5	厚狭川水系 村群	10	吉田	10	末益村、厚狭村、津布田村、山野井村、今浦御開作、伊佐村、山中村、於福村、厚保村、大嶺村。除外は吉田村、松屋村、宇津井村、土生浦、河原村。
6	阿武川水系 村群	21	奥阿武	9	吉部村、高佐村、片俣村、蔵目喜村、生雲村、地福村、嘉年村、福田村、徳佐村。除外した10村は日本海沿岸東部。
			当島	11	河島庄、椿東分、椿西分、福井下村、福井上村、紫福村、山田村、三見村、川上村、明木村、佐々並村。除外は大井黒川村。
			山口	1	篠目村を加える。
7	瀬戸内東部 村群	93	大島・上関・ 熊毛・前山代	83	大島の32村全村、上関の26村全村。熊毛宰判は八代村を除く24村。前山代宰判の中須村を追加。
			都濃	10	末武上村、末武中村、末武下村、久米村、切山村、櫛ヶ浜浦、平田開作村、三井村、浅江村、大河内村
8	瀬戸内中部 村群	31	都濃	5	川上村、小畑村、戸田村、湯野村、長穂給
			三田尻	15	三田尻村、三田尻町、宮市町、仁井令、伊佐江村、新田村、向島、浜方、田島、西ノ浦、西ノ浦前ヶ浜、西ノ浦新御開作、西ノ浦鹿角村、江泊村、傘礼村。
			小郡	11	江崎村、陶村、台道村、佐山村、遠波村、井関村、阿智須浦、岐波村、二島村、本郷、青江村、大海村。
9	瀬戸内西部 村群	15	舟木	10	万倉村・今富村、西万倉村、舟木村、舟木市村、逢阪村、東高泊村・有帆村、西高泊村、後瀨御開作、西須恵村、小串村・宇部村・川上村。
			吉田	5	吉田村、松屋村、宇津井村、土生浦、河原村。
10	日本海沿岸 西部村群	25	先大津・ 前大津	25	先大津の13村全村、前大津の12村全村。
11	日本海沿岸 東部村群	11	奥阿武	10	鈴野川村、小川村、田万村、宇生賀村、惣郷村、弥富村、江崎村、須佐村、宇田村、木与村
			当島	1	大井黒川村

表3 水系別の村群と地区別の村群における淡水性魚介類の出現頻度（注3）

長州藩地域区分		東 部		中 部			西 部			北 部			計
目録 No.	村群名	錦川 水系	瀬戸内 東部	佐波川 水系	樫野川 水系	瀬戸内 中部	厚東川 水系	厚狭川 水系	瀬戸内 西部	阿武川 水系	日本海 西部	日本海 東部	
		品目名\村数	33	93	37	25	31	27	10	15	21	25	11
9	ウナギ	11	50	21	22	11	18	7	10	18	19	4	191
20	ギンブナ	2	40	9	15	9	20	7	12	9	21	4	148
27	ハヤ	9	27	19	19	8	12	6	8	12	9	7	136
28	ドジョウ	5	36	8	12	10	12	8	12	4	16	—	123
33	アユ	15	17	14	17	1	15	4	3	7	11	4	108
84	ゴリ	4	35	10	15	2	—	—	—	13	16	6	101
22	コイ	—	8	3	6	2	11	4	6	6	5	2	53
30	ナマズ	—	—	8	6	2	6	4	3	3	4	—	36
35	サクラマス	6	12	10	—	1	1	—	—	1	5	—	36
95	ヒラメ	9	5	6	2	1	—	—	—	—	—	—	23
29	ギギ	5	1	12	—	1	—	—	—	—	3	—	22
128	タニシ	—	15	—	1	3	—	—	—	1	9	—	29
26	ウグイ	—	—	—	—	—	1	1	1	2	—	1	6
18	タナゴ	—	9	—	—	1	—	—	—	—	9	—	19
23	カマツカ	—	1	—	—	—	—	—	—	1	2	—	4
41	メダカ	—	—	—	—	—	—	—	—	2	15	—	17
25	アブラボテ	—	—	—	—	—	—	—	—	2	10	—	12
59	カジカ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	7	—	8
34	サケ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	2
82	ドンコ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	5
31	アカザ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	3
24	ムギツク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2
47	オヤニラミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2
58	アユカケ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
19	カワムツ	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	2
21	キンギョ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
123	カワニナ	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2
139	モクズガニ	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
148	カワエビ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2

ArcMap10.5.1（ESRI社）を使用し、空間検索で河川のラインを含む村を抽出した。水系に対応する10～40近くの村からなるグループを「水系村群」と名付け、たとえば樫野川水系に対応する注進案の村々を「樫野川水系村群」と呼ぶことにする。主要水系、水系村群域の位置と範囲は図2に、各水系と地区に含まれる村は表2に示している。1つの村が複数の河川水系と空間的に重なる少数の事例については、より長い距離の河川が重なる水系に含めた（注2）。河川水系ラインデータは、「国土数値情報河川データ第3.1版」を使用した。格納されている水系域コードをもとに各河川の水系ラインデータを

作成、空間検索に使用した。また、注進案に記載されている村の地図データには、『防長風土注進案 村別地図データ2016年度版』（中村・五島2017）を用いた。

主要河川の水系に含まれない村は175村ある。瀬戸内海側では錦川、佐波川、樫野川、厚東川、厚狭川の各水系域の南側に、日本海側では阿武川水系の東西に隣接する。河川水系との位置関係を考慮し、それらを5つの村群に分けた。錦川水系の南側にあたる地区を瀬戸内東部、佐波川水系と樫野川水系に隣接する地区を瀬戸内中部、厚東川水系と厚狭川水系に隣接する地区を瀬戸内西部とした。阿武川水系の東西に隣接する地区は、それぞ

れ日本海沿岸西部、日本海沿岸東部とした。

以上の作業により合計11の村群を設定した（図2・表2）。「村群」を単位空間の表現として用いるのは、村群の地理的範囲のかたちは村の形状の反映であり、地理学的区分にもとづく形状ではないからである。水系村群は地理学でいう流域の範囲に近く、読み替えても大過はないかもしれないが、空間分割の基準が流域や集水域とは異なることを明示しておくほうがよいと判断した。

3. 淡水性魚介類の分布類型

3. 1. 村群別の品目集計

『防長風土注進案』の産物データベースから作成した目録データ（長州藩内328村の村ごとに各品目について有り=1、無し=0として記載している）にもとづき、淡水性魚介類（魚類25品目、貝類2品目、節足動物2品目）の各品目について11の村群別に集計し、各品目の出現頻度をまとめた（表3）。これは分布研究の基礎データとなるものである。しかし、村群を構成する村数は多い・少ないの差があるため、実数値では品目どうしや地域間の比較が難しい。

こうした村群規模によるバイアスを取り除くため、各品目の出現頻度（表3）を、各村群の全村数に対する比率（出現率）に換算したものが表4である。例えば、樫野川水系では25村のうち88%の村（22村）でウナギの記載がみられる、ということを示している。品目ごとに比率を算出しているため、各村群の合計は100%にはならない。また、表4では、各村群でみられる淡水性魚介類のうち、原則として出現率の上位8位までを太字で示している。これは29品目の上位3分の1にほぼ相当し、村群における主要構成品目といえる。なお、同率のため10品目程度を含む場合や、8位以内であっても10%未満のため主要構成品目からは外した場合もある。

3. 2. 淡水性魚介類の分布類型

注進案に記載された淡水性魚介類は、記載がある村数・村群数・宰判数や村群における出現率をもとに、全域型、地域型、局地型の3類型に区分できる。また、魚介類の空間分布の偏り（地域性）を記述する場合、長州藩内を東部・中部・西部・北部の4地域に区分すると説明がしやすくなるため、以下ではこの地域区分をしばしば用いる。これは現在の山口県の地域区分におおよそ一致する。各地域に含まれる村群については表4を参照されたい。

（1）全域型

ウナギ、ギンブナ、ハヤ、ドジョウ、アユが該当する。記載のある村が100村以上で、ほぼすべての村群・宰判にみられる品目である。各村群における出現率は30%

以上がほとんどである。ウナギは長州藩の全328村のうち191村と記載村数が最も多く、錦川水系を除く5水系で50%以上の記載率を示し、樫野川水系と阿武川水系の村群では80%を超える。地図を見ても錦川以外の各水系に面的な広がりを見せながら分布する（図3）。なお、佐波川水系の下流側の三田尻宰判では、淡水性魚介類に関する記載が皆無であり、注進案の編さん時に何らかの事情が関与した可能性を考慮が必要であろう。ギンブナは東部の錦川水系村群では出現率は低い、西部の厚東川水系、厚狭川水系の村群では高い。

アユは、瀬戸内海側では錦川、佐波川、樫野川、厚東川、厚狭川の各水系村群でおおむね40%以上の高い出現率をみせる一方、主要水系に属さない村群では20%以下と低い。分布地図では、瀬戸内海側で主要河川水系の村群に記載のある村が多く、本流規模の大きい河川水系を好むアユの生態学的特徴が反映されている（図4）。また、瀬戸内海側の沿岸部には少ない一方、日本海側では海に接した村群でも記載例が多い。これは山地が海に迫る日本海側の地形が影響していると思われ、阿武川水系以外の村群でもアユの出現比率は高い。

全域型の5品目は、各水系村群で出現率の上位8位までにほぼ必ず入り、品目構成の主軸となる魚類である。主要水系に属さない村群でも多い。長州藩内における共通品目あるいは基本品目といえよう。

（2）地域型

ゴリ、コイ、ナマズ、サクラマス、ヒラメ、ギギ、タニシ、ウグイ、タナゴは、村群により出現率の高低がある。記載がある村群数や宰判数にはばらつきが大きい。地域型の分布の特徴は、複数の村群を含む地域空間スケールでみるとわかりやすい。ゴリは、山口県東部・中部・北部の村群で出現率が高い一方、西部では記載のある村がない。分布地図をみると瀬戸内海側の西部地域が空白地帯になり、長州藩中部の樫野川水系、佐波川水系の村群では山側に記載事例がやや偏る（図5）。コイやナマズは藩の中部・西部・北部に多い。サクラマス、ヒラメ（サツキマスやアマゴ）、ギギは東部から中部にかけて多く、サクラマスとヒラメの分布は同じ傾向を示す（図6）。ウグイは出現率は低い、西部と北部に偏る地域性をみせる。タナゴと貝類のタニシは藩の東部と北部で多い。

（3）局地型

表4ではカマツカ以下の15品目が該当する。記載のある村が少数の村群に偏り、大部分の出現率は低い。

3. 3. 主要河川水系における品目構成の特徴と地域性

長州藩東部の錦川水系村群における淡水性魚介類の記載品目構成は、ウナギ、ハヤ、ドジョウ、アユの基本品

表4 水系別の村群と地区別の村群における淡水性魚介類の出現率

分布型	長州藩地域区分		東 部		中 部			西 部			北 部		出現率 判数	
	目録 No.	村群名 目録名\ 村数	錦川 水系	瀬戸内 東部	佐波川 水系	樫野川 水系	瀬戸内 中部	厚東川 水系	厚狭川 水系	瀬戸内 西部	阿武川 水系	日本海 西部		日本海 東部
全域型	9	ウナギ	33%	54%	57%	88%	35%	67%	70%	67%	86%	76%	36%	16
	20	ギンブナ	6%	43%	24%	60%	29%	74%	70%	80%	43%	84%	36%	15
	27	ハヤ	27%	29%	51%	76%	26%	44%	60%	53%	57%	36%	64%	16
	28	ドジョウ	15%	39%	22%	48%	32%	44%	80%	80%	19%	64%	—	15
	33	アユ	45%	18%	38%	68%	3%	56%	40%	20%	33%	44%	36%	16
地域型	84	ゴリ	12%	38%	27%	60%	6%	—	—	—	62%	64%	55%	12
	22	コイ	—	9%	8%	24%	6%	41%	40%	40%	29%	20%	18%	13
	30	ナマズ	—	—	22%	24%	6%	22%	40%	20%	14%	16%	—	10
	35	サクラマス	18%	13%	27%	—	3%	4%	—	—	5%	20%	—	11
	95	ヒラメ	27%	5%	16%	8%	3%	—	—	—	—	—	—	7
	29	ギギ	15%	1%	32%	—	3%	—	—	—	—	12%	—	4
	128	タニシ	—	16%	—	4%	10%	—	—	—	5%	36%	—	6
	26	ウグイ	—	—	—	—	—	4%	10%	7%	10%	—	9%	4
局地型	18	タナゴ	—	10%	—	—	2%	—	—	—	—	36%	—	5
	23	カマツカ	—	1%	—	—	2%	—	—	—	5%	8%	—	3
	41	メダカ	—	—	—	—	—	—	—	—	10%	60%	—	3
	25	アブラボテ	—	—	—	—	—	—	—	—	10%	40%	—	3
	59	カジカ	—	—	—	—	3%	—	—	—	—	28%	—	3
	34	サケ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4%	9%	2
	82	ドンコ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20%	—	2
	31	アカザ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12%	—	1
	24	ムギツク	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8%	—	1
	47	オヤニラミ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8%	—	1
	58	アユカケ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4%	—	1
	19	カワムツ	—	—	5%	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	21	キンギョ	—	1%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	123	カワニナ	—	1%	—	—	—	—	—	—	5%	—	—	2
139	モクズガニ	—	3%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
148	カワエビ	—	1%	—	—	—	—	—	—	—	4%	—	2	

目にゴリ、サクラマス、ヒラメ、ギギなど藩の東部から中部に多くみられる地域型の品目が加わる。ハヤの出現率は低めで、ギンブナは数字上主要な品目になっていない。島嶼部と沿岸部を含む瀬戸内東部の村群では、ギンブナ、アユ、ギギ、タニシなどの出現率に河川水系との違いがみられる。

長州藩中部の佐波川水系と樫野川水系の村群における淡水性魚介類の記載品目構成は、ウナギ、ギンブナ、ハヤ、ドジョウ、アユの基本品目に、瀬戸内東部・中部に多いゴリ、中部から西部に多いナマズを加え、両隣の地域性を混合したような内容を持つ。より東部に近い佐波川水系ではサクラマスやギギがさらに加わる。沿岸部の

瀬戸内中部村群では、ゴリ、コイ、ナマズの出現率が低い点が河川水系村群と異なる。

長州藩の西部に位置する厚東川水系、厚狭川水系の村群における淡水性魚介類の記載品目構成は、ウナギ、ギンブナ、ハヤ、ドジョウ、アユの基本品目に、中部・西部に多いコイ、ナマズの地域型品目を加える。他の水系に多く現れるゴリがこの2つの水系では見られない。厚狭川水系ではウグイの記載例が多い。沿岸部の瀬戸内西部村群の品目構成は河川水系とよく一致している。藩西部の各地区では、局地型の魚介類の記載はない。

長州藩北部の阿武川水系村群における淡水性魚介類の記載品目構成は、ウナギ、ギンブナ、ハヤ、ドジョウ、ア

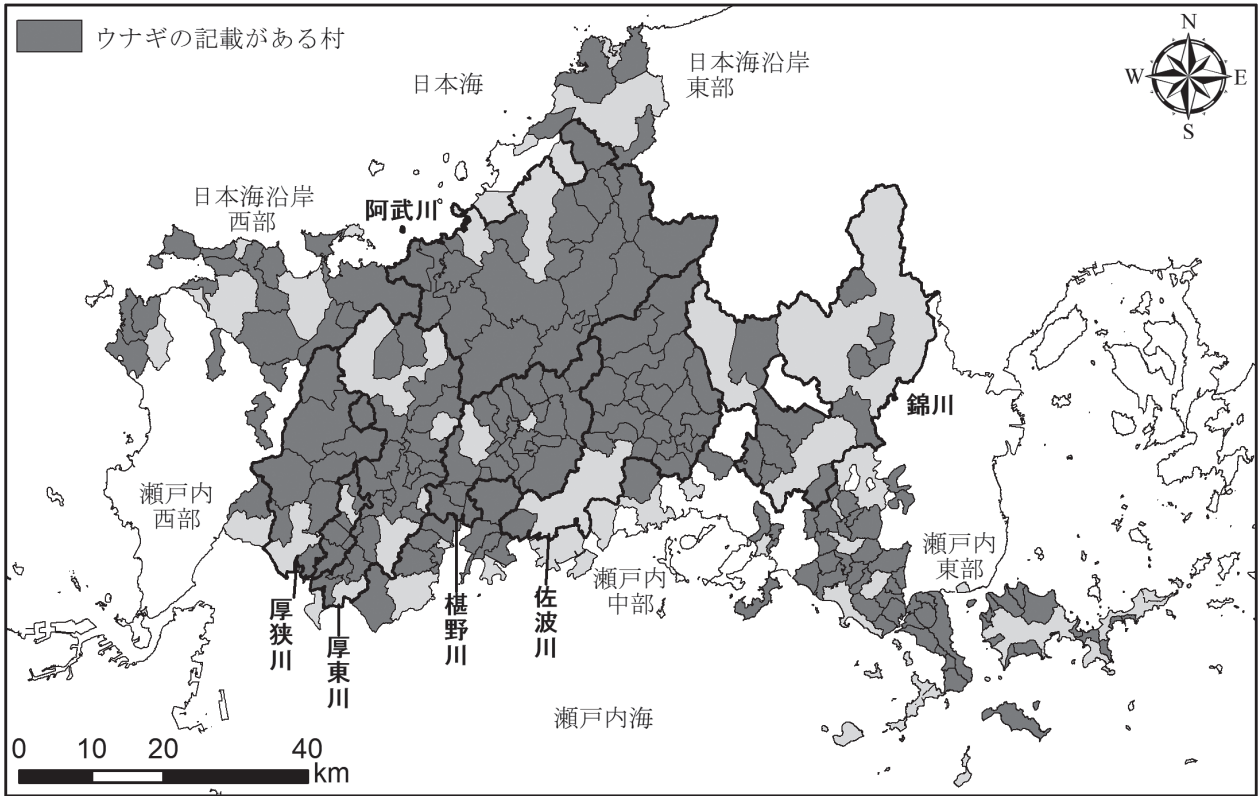


図3 全域型 ウナギの記載がある村の分布（11村群、191村）

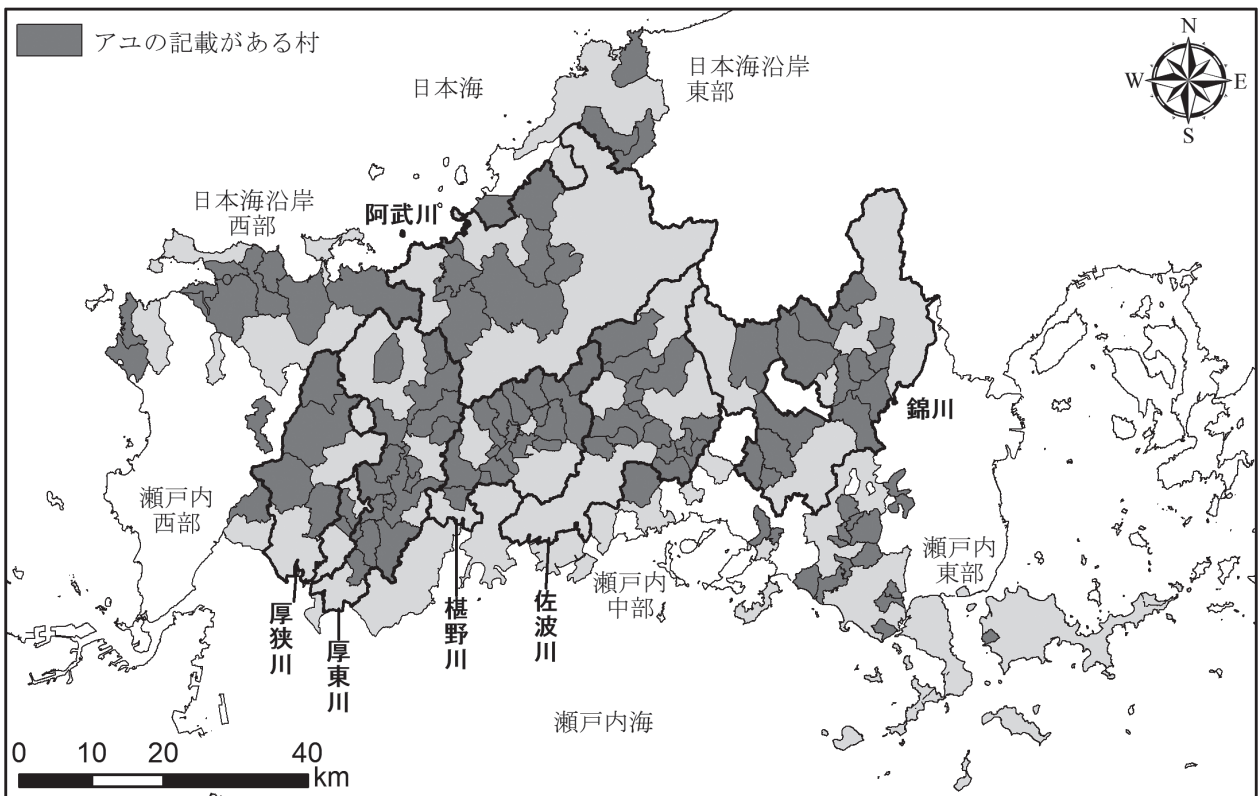


図4 全域型 アユの記載がある村の分布（11村群、108村）

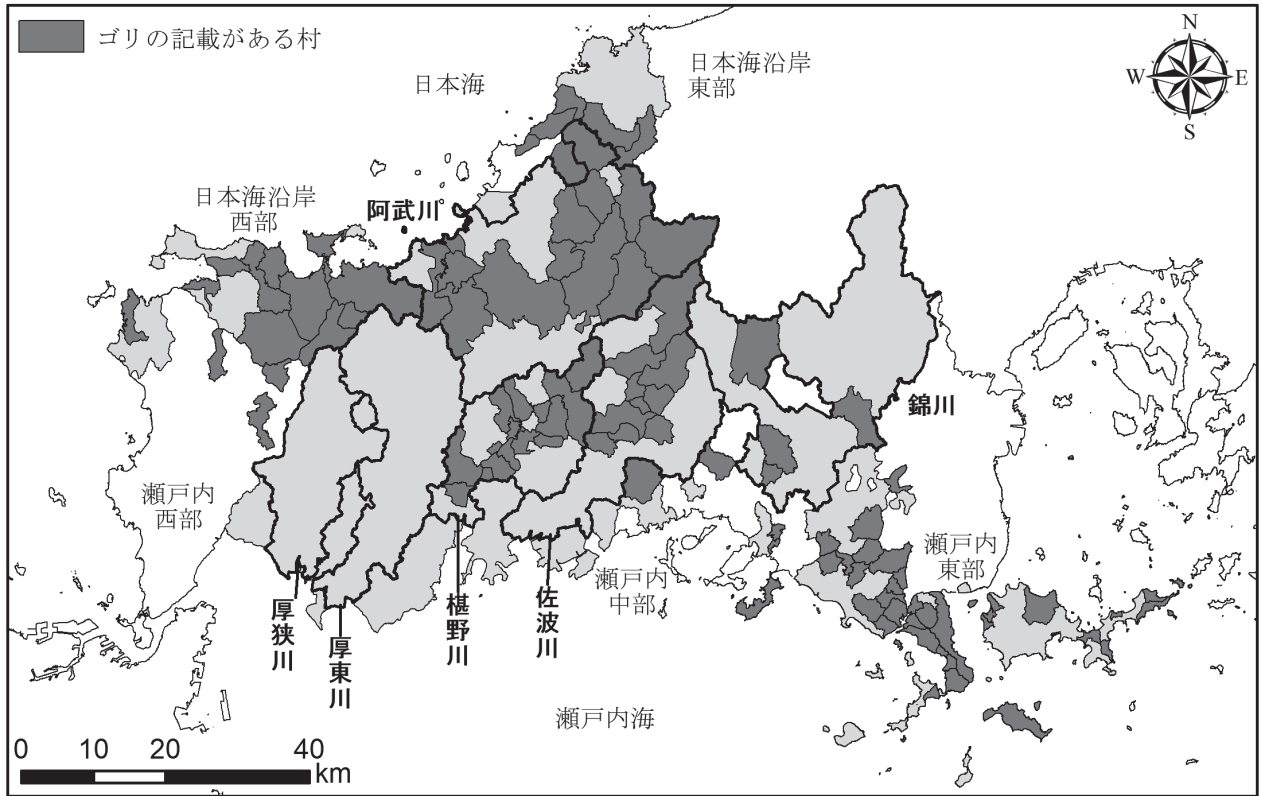


図5 地域型 ゴリの記載がある村の分布（8村群、101村）

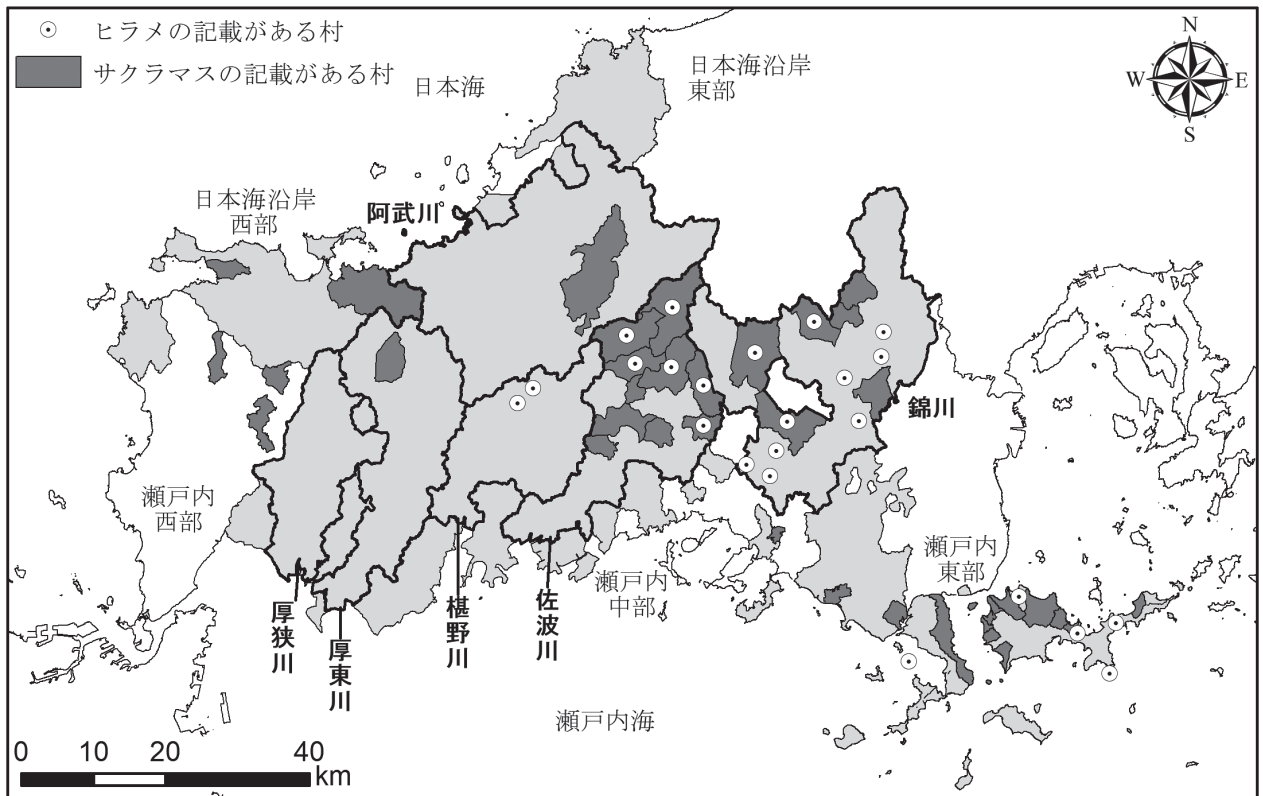


図6 地域型 サクラマスやヒラメ（サツキマスやアマゴ）の記載がある村の分布（7村群36村と5村群23村）

ユの基本品目に、ゴリ、コイ、ナマズが加わる。この構成は、南側に隣接する榎野川水系とよく似ている。一方で、メダカやアブラボテなどの局地型がある程度の出現率をみせる点は他の水系村群とは異なる。この水系の西側に位置する日本海沿岸西部では地域型や局地型の品目が非常に多い(表4)。生態学的特徴なのか、記載方針の違いによるものなのか、今後の検討が必要である。

おわりに

注進案に記載された淡水性魚介類について、長州藩内を流れる6つの主要な河川に着目し、河川水系に対応する村群ごとに品目構成を分析した。その結果、長州藩全域で共通する基本的な構成品目(ウナギ、ギンプナ、ハヤ、ドジョウ、アユ)を識別するとともに、地域型の品目加わることで長州藩東部、中部、西部、北部の地域性が生成されることも明らかになった。

主要河川水系別と宰判別の集計を比較すると、大局的な傾向はあまり変わらないものの、前者が分布地図の特徴をより適切に反映している場合がある。アユは、宰判別では水系に属する宰判(表1のトーン掛けした宰判)で201村中76村(38%)、属さない宰判で127村中32村(25%)である。一方、表3を集計すれば水系に属する村群153村では72村(47%)であるのに対し、沿岸部の村群175村では36村(21%)と違いが明瞭になる。ゴリが沿岸地域の瀬戸内中部・西部でほとんど記載されない状況も、表1よりも表4の方が明確に示している。

なお、注進案に記載された淡水性魚介類の分布研究は、本州西端部におけるダムの設置など河川環境が大きく改変される以前の様相復元に役立つ可能性がある。それがもしより自然状態に近い魚介類の構成と分布を示すものならば、本研究の成果は将来、先史考古学における食文化研究や遺跡立地研究に活用できるかもしれない。

本稿をまとめるにあたり、神松幸弘(立命館大学グローバル・イノベーション研究機構)、松森智彦(同志社大学人文科学研究科)の両氏よりご協力とご教示を賜った。厚く御礼を申し上げる。

注

- 1) 注進案のゴリは、ヨシノボリ類など複数の魚種の混称で淡水性の魚種を多く含むと考えられる(松森ほか2015:89)。ヒラメはサツキマスやアマゴの地方名称である(五島1991:45、藤岡1991:24)。注進案に記載されるハゼも混称と考えられるが、沿岸部の宰判に多いため今回の集計からは除外した。
- 2) 水系に対応する注進案の村を抽出する別の方法として、国土交通省の流域メッシュデータから作成した流域面(ポリゴン)データでも空間検索を試みたが、水

系のラインを用いた場合よりも一回り大きい範囲の村を抽出してしまい、適切な結果が得られなかった。技術的な問題点については改めて検討したい。

- 3) 表3の計(記載村数の合計)のうち、ハヤとモクズガニは第64巻第1部の表2ではそれぞれ137村、9村となっている。同じデータの集計で結果が異なるのはこの2品目であり今回の村数を正とする。

参考文献

- 荒木一視・五島淑子・ミホバ,D 2002 藩政期地誌書「防長風土注進案」のGIS化の試み:歴史地理教材としての利用と歴史地理学への導入、山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第13号,1-13
- 五島淑子 1987 天保期長州藩における食用産物について-『防長風土注進案』の分析を通して-,山口大学教育学部研究論叢 第37巻第1部,43-55
- 五島淑子 1990 19世紀中葉の日本の食生活に関する研究-『防長風土注進案』と『斐太後風土記』の分析を通して-,1-148
- 五島淑子 2015 江戸の食に学ぶ 幕末長州藩の栄養事情 臨川書店
- 中村大・五島淑子 2015 『防長風土注進案』の村別地図データ作成,山口大学教育学部研究論叢 第64巻第1部,73-82
- 中村大・五島淑子 2016 『防長風土注進案』の村別地図データの改良について,山口大学教育学部研究論叢 第65巻第1部,25-32
- 中村大・五島淑子 2017 『防長風土注進案』に記載された穀物類の地図化,山口大学教育学部研究論叢 第66巻第1部,31-40
- 中村大・五島淑子 2018 『防長風土注進案』に記載された農作物と採集品にみられる3つの空間分布類型,山口大学教育学部研究論叢 第67巻,163-172
- 藤岡豊 1991 山口のさかな、藤岡豊教授退職記念事業会
- 松森智彦・山根麻希・中村大・五島淑子 2015 『防長風土注進案』の産物記載にみる食品目録(2)-魚介類・海藻類を中心に-,山口大学教育学部研究論叢 第64巻第1部,83-96
- 山口県文書館 1960~1965 防長風土注進案 全22巻、山口県立山口図書館(復刻マツノ書店1983)